

Title	Tetsuo Takayama : Les Oeuvres romanesques avortées de Balzac (1829-1842). : Studies in the humanities and social relations volume VIII. 1966 (The Keio institute of cultural and linguistic studies)
Sub Title	
Author	大浜, 甫(Ohama, Hajime)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1967
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.24, (1967. 12) ,p.178(115)- 185(108)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00240001-0185

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Tetsuo Takayama : *Les Oeuvres romanesques avortées de Balzac (1829-1842)*.
 Studies in the Humanities and Social Relations Volume VIII. 1966 (The Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies)

大 浜 甫

筆者の高山鉄男氏は慶応義塾大学文学研究科に在学中から Balzac 研究に専念され、修士課程終了後 フランス に留学、Sorbonne の Pierre-Georges Castex 教授の指導のもとに、とくに Balzac 関係の資料の宝庫とされる Lovenjoul 図書館の利用を許可されて研究を続け、1962年 Paris 大学より doctorat を授与された若い学究であって、本書はその折の学位請求論文にその後の研究成果を加えてまとめられたものである。その内容は、標題の示すとおり、Balzac の未完成に終わった小説作品の研究であり、一つ一つの作品について、それがいつ頃着想されたか、その主題はどのようなものであったか、それがどのように変化していったか、そして結局はどういう理由で完成されなかったかを、未刊の原稿、ノートをはじめ書簡、生前刊行された単行本に掲載された近刊予告等、膨大な資料にもとづいて実証的に解明しており、現在この種の Balzac 研究としては最も綿密でまた総合的なものといえる。だがこの研究の真価は単にそのような文献的な考証だけにあるのではない。それは、この従来まったく未開拓とはいえないまでも少なくとも網羅的、総合的には手のつけられていなかった分野を解明することによって、Balzac の création littéraire の秘密にせまろうとしている点にある。

第1章 LES PROJETS DE ROMANS HISTORIQUESでは、Balzac が1824年か1825年頃 *Histoire de France pittoresque* なる総題のもとにか

なりの数の歴史小説を書こうと思いつきながら、結局は *Les Chouans* を除いては一つも完成しえなかったことが、残した断片、ノート等によって明らかになる。ところで筆者は、その小説集の構想が Balzac の念頭から消えた時期（1833～1834年）が *Etudes de Moeurs* が出版されはじめた時期と一致することに着目して、Balzac の過去の現実を舞台とする小説の計画がこの時期になると、現代社会を研究しようとする意図に吸収されてしまったのだ、と考える。だが一方、彼が歴史小説のために調査し集めていた資料は、一部はのちに *Etudes philosophiques* に収められるいくつかの成功した作品——例えば *Sur Catherine de Médicis*——に、また一部は *Etudes de Moeurs* 中の *Scènes de la vie militaire* に活用された、とする。そして最初は歴史小説として発表された *Les Chouans* がのちに *Scènes de la vie militaire* に組み入れられたことが象徴するように、未完の作品の場合でも Balzac の歴史小説集の構想は次第に *Scènes de la vie militaire* のそれになっていったのだと考えて、その典型的な例として *La Bataille* と *Les Vendéens* をとり上げる。

La Bataille はもと *La Bataille 1800* なる題で Marengo の戦いを舞台とする歴史小説として、*Histoire de France pittoresque* の一篇として着想され、その後（1830年）*La Bataille de Wagram* と改題され、背景も時代が下って1809年の Wagram での戦いになるが、そこではまだ歴史小説であることに変わりなかったらしい。ところが1834年末か1835年初めになると、Balzac はこの作品を *Scènes de la vie militaire* に組み入れようとするようになる。また *Les Vendéens* は標題どおり La Vendée の乱を主題とする、内容からいってもその芽はすでに *Les Chouans* に含まれる歴史小説で、1930年には構想もほぼ固ったらしいが、1836年になるとやはり *Scènes de la vie militaire* に組みこまれることになる。筆者は、こうして、この結局は未完に終わった二つの作品が歴史小説から戦争小説になっていく道程をたどったあと、*Scènes de la vie militaire* 全体の構想に研究のメスを入れる。

この構想は年とともにふくれ上り、1835年か1836年頃に書かれたと推定

されるノートによれば十二篇の作品を、さらに1845年のリストによれば、じつに二十三篇の作品を含む大計画になる。ところが最終的には、この cycle は周知のとおり *Les Chouans* と短篇小説 *Une Passion dans le désert* だけで構成される、*Etudes de Moeurs* 中で最も貧弱なものとなり、筆者のこぼを借りれば *semi-avortement* に終わってしまう。

ここで筆者は第1章の結論として、小説家 Balzac が歴史小説から出発したという通説を認める一方、この歴史小説における失敗と、その変形である軍事小説における失敗という二重の失敗が、Balzac をして *La Comédie humaine* の作者として成功させたのだ、と断定する。つまり、Balzac は遠い過去を舞台とする歴史小説を、ついで Napoléon 時代を舞台とする軍事小説を放棄することによって、Restoration から Louis-Philippe 時代を背景とする小説集の作者になることができた、というわけである。

このことは程度の差はあれ、Balzac のいわゆる哲学小説、思想小説についてもいえるようである。第2章 EN MARGE DES ROMANS ET CONTES PHILOSOPHIQUES, 第3章 EN MARGE DES ETUDES PHILOSOPHIQUES., また第5章 UN CYCLE AVORTÉ DE LA COMÉDIE HUMAINE : LES ETUDES ANALYTIQUES では、これら三つの作品集のために考えつかれた哲学小説、思想小説がとり上げられる。だがここでも筆者は多くの失敗作（1835年には *Etudes philosophiques* は 30 vol. の小説集となる構想であった）の失敗の歴史を文献的にたどるだけでなく、いくつかの重要な問題を提起し、解明している。

例えば第2章では *Le Crétin* (のちに *Ecce Homo*) の構想が論じられるが、これは〈思考が生命力を消耗させる〉という Balzac 特有の思想を裏返しにして表明する小説で、〈思考〉のない人間、つまり *crétin* であるが故に百才以上の長寿を保つ男の物語として着想されたそうで、いわば *Louis Lambert* の *contre-partie* であるが、〈思考の不在〉、〈drameの不在〉を *dramatiser* しようとする点ではじめから矛盾を含んでおり、失敗に終るのが当然であった、とする。そしてこの作品の構想がだいたい

Louis Lambert と同じ頃 (1830~1836年) にあたためられていたことに着目した筆者は、類似した主題もしくは対照的な主題の二つの作品が同時に着想され、一つは完成し一つは未完に終るという Balzac によく見受けられるケースが、ここにも見られる、とする。これと関連して第 3 章では *Les Livres des douleurs*, と *Soeur Marie-des-Anges* なる作品の構想がとり上げられるが、前者は肉体的苦痛に対する精神の抵抗を主題とし、後者は Louis Lambert を女性にしたような女を主人公とするものであったらしい。そうしてみると、もしこの二つの作品と *Le Crétin* が完成していれば <cycle de Louis Lambert> とでも呼ぶべき四部作が実現したと考えられるわけである。

また同じ *Romans et Contes philosophiques* の一篇として着想された *Les Souffrances de l'inventeur* は、Bernard Palissy を主人公とする一種の<絶対の探求>の物語であったものが次第に変化して、結局は完成されずに終るが、筆者はこの作品と同じ頃 Balzac が家庭の悲劇を主題とする *Les Jeunes Gens* の構想を練っていたことに着目して、あの有名な長編 *La Recherche de l'Absolu* はこの二つの失敗作の主題が混合してでき上がったものではないか、と推定する。その他第 2 章では *Les Aventures administratives*, *Le Roi*, *Le Prêtre*, *Le Mendiant* 等の、*Romans et Contes philosophiques* のプランにあった作品が研究され、これらが結局は未完に終わったものの、その主題はそれぞれ *Les Employés*, *Un Drame au bord de la Mer*, *Le Curé de Village*, *Le Colonel Chabert* のうちに生かされ、こうした傑作を生み出したことが、明らかにされている。

尚この章で高山氏は *La Vieille Fille* と題された断片の解釈をめぐる Philippe Bertault 氏の説を訂正する新説を発表している。この断片は明らかに *Scènes de la vie privée* に収められた *Le Curé de Tours* の前身であったらしいが、Bertault 氏はそれをもと *Romans et Contes philosophiques* のために計画された、司祭を主人公とする哲学小説の下書きと考えているそうである。それに対して高山氏は、*La Vieille Fille* なる標題は *Romans et Contes philosophiques* のリストに一度もでてこない、また

もし Balzac が Bertault 氏のこのような内容の哲学小説を考えていたとすればそれに *La Vieille Fille* というような題をつけることはおかしい、断片自体の内容から判断してもこれは明らかに独身者を扱った小説である、という三つの理由をあげて、この断片がはじめから *Scènes de la vie privée* の一篇として着想されたものだ、と推定しているのである。

第3章の終りで筆者は Balzac のいわゆる哲学小説全体について結論して、現在われわれに残されている *Etudes philosophiques* の作品の数と質をその計画と比較すれば、*Etudes philosophiques* は *La Comédie humaine* 中ではやはり成功した cycle とはいえないが、一方この失敗そのものが *Etudes des Moeurs* の成功につながるものであり、また逆に、*Etudes de Moeurs* 中のある種の作品にあっては、現実的な主題のかげに、幻想的な、また idéologique な主題がかくされている、とする。

第5章では、結局 *Physiologie du Mariage* ただ一つしか完成できなかった点で *Etudes analytiques* は失敗した cycle であることを認める一方、筆者は、計画だけで終わってしまった四つの作品を論じながら、それと他の cycle に属する成功した作品とのつながりを探ってゆく。例えば、*Essai sur les forces humaines* は dynamisme を主題にする点で *Louis Lambert* に、また *Analyse des corps enseignants* は優生学的な考えを主題にする点で *L'Enfant maudit* につながる、というわけである。

紹介の順序は前後するが、第4章 EN MARGE DES ETUDES DE MOEURS では10篇ほどの失敗した作品や作品集がとりあげられ、Balzac がこの *La Comédie humaine* 中で最も成功した cycle の場合でさえ、いくつもの avortement や生みの苦しみを経験したことが明らかにされる。そしてここでも注目されるのは、こうした失敗の研究が *Etudes de Moeurs* 成立の研究につながっていることである。Balzac は1832年、*Conversations entre onze heures et minuit*, *Scènes de Village*, *Etudes de femmes* と題される三つの小説集の構想を抱き、その一部は書き上げて雑誌に発表しているそうである。そして *Conversations* はサロンでの会話の形式でパリの裏面を描こうとしたものらしく、これは明らかに

Scènes de la vie parisienne の前身と考えられ、また *Scènes de Village* は一時そのプランのうちに *Le Médecin de Campagne* を含んでいたこともあって、*Scènes de la vie de campagne* の前身であったと推定されるわけである。尚、この章でも個々の完成されなかった作品と完成された作品との関係が指摘され、例えば相続問題を扱った *La Succession* は *La Rabouilleuse* の原型と見なされ、*Les Héritiers Boisrouge* の一主要人物は *Les Illusions perdues* の *Lucien Rubempré* を想わせ、またその残された断片では第2章は *Ursule Mirouët* と題されているそうである。またこの未完の小説のなかではじめて、のちに *La Comédie humaine* を構成する重要な要素となった <retour des personnages> の手法が用いられていることも、明らかにされている。

筆者は最後に全体の CONCLUSION において、Balzac の création littéraire のいくつかの傾向を指摘している。Balzac があるいは類似した、あるいは対照的な主題を同時に思いついていたことは、多くの研究者によって認められているが、この傾向は、<cycle de Louis Lambert> が代表するように、未完の小説の場合にも確認される。そしてこのことは、彼の作品全体の一貫性と無縁ではなく、Balzac は完成した作品の場合だけでなく未完に終わった作品の場合でも一貫的な小説世界を創造しようとした作家であった、とする。だが一方、Balzac にあってはいったんある主題が着想されると、それはたちまち自律性をおび、作者の予期しないような変化、発展をとげる。これは Balzac における現実世界と架空の世界との混同にも通じるもので、彼が未完の作品をあたかも完成したかのようには宣伝したり、ときには手もつけていない作品を出版屋に受けとりこさせたりしたというエピソードも、ただ Balzac の欺瞞とか大ぼらとして片付けてしまうことはできない。その場合まず第一にだまされているのは Balzac 自身だからである。そしてこのおどろくべき imagination が *La Comédie humaine* を生み出す一方、多くの作品を未完に終わらせたのである。未完に終るのは、その構想が実現されるためにはあまりにも大きすぎたり、美しすぎたりしたためであり、その場合、Balzac は自分自身の

imagination を制御できなかったのだ、というわけである。そして最後に筆者は、Balzac がつぎつぎに経験した三つの失敗、つまり歴史小説と *Etudes philosophiques* と *Etudes analytiques* における失敗が、romans de moeurs における成功につながり、この失敗がなかったならば、*La Comédie hamaine* の成功もなかっただろう、と結論する。

以上、筆者が AVANT-PROPOS でうたっている目的——失敗に終わった Balzac の小説作品を一つ一つそれ自体において検討し、それらと完成した作品との関係を明らかにし、彼が création littéraire において出会った障害と彼の創作の方法とを解明するという目的——を、この研究はみごとに達成し、とくに最初に紹介したように、Balzac の création に従来の Balzac 研究とは異つた角度から照明をあてている点、本書の意義はきわめて大きいといえよう。ただ、一読者、紹介者としての素朴な疑問を提出させてもらうなら、Balzac の小説の構想の変化、挫折の理由に外的な要因を考慮しなくていいのだろうか、ということである。つまり Balzac のたどった création romanesque の道が当時の他の作家たち（これはフランス人には限らない）のたどった道と平行するにしろ、交叉するにしろ、とにかくまったく無縁であったとは考えられないわけである。むしろ文学史的研究を目的としない本書に向ってそのような疑問を提出すること自体、見当外れにちがいない。ただ、高山氏自身、第1章では Alfred de Vigny の歴史小説 *Cinq-Mars* に、また Balzac の Walter Scott の影響からの脱却に言及しているところからみて、文学史的な背景に必ずしも無関心ではないものと思われる。そして Vigny 以外にも Victor Hugo, Prosper Mérimée 等、歴史小説から出発して次第にそれから離れていった作家が十九世紀前半にはかなりいたはずであり、Balzac の場合もそうした十九世紀前半における roman という genre の変化の歴史と結びつけて考察することも必要なのではないだろうか。むしろこの問題はきわめて大きな問題にはちがいない、が、ぼくたちは高山氏がいずれこの問題ともとりくんで、いつか本書とはまた異つた角度から Balzac に照明をあててくれることを、期待したい。

尚、高山氏が本研究によって昭和41年度の義塾員と、第3凹灰野員を授与されたことを付言する。